

## 社会事業の哲学的原理と

### 成瀬先生の三つの教え

菅 支那子

昨秋、東京で開かれた国際社会事業会議（I・C・S・W）と国際社会事業教育連盟（I・A・S・S・W）の機関紙「国際社会事業」は一九五六年、ドイツのミュニツヒで開かれた、第八回目の国際社会事業教育会議の決議として、誕生した季刊雑誌である。昨年、はからずもその第一巻、第一号で、アムステルダム社会事業大学の教授、P・H・ファン・ブラーグの「社会事業の基礎概念」という論文を読んで以来、私の頭の隅にこびりついていて、聖オーガスチヌスの言葉「神に憩うまでは安きを得ず」の意味も幾分、理解出来る程に私を休ませぬ一つの問題は、ブラーグ教授がそこで述べている社会事業の哲学的基礎概念と成瀬先生が私共に遺された三大教育精神との関係である。

この三大教育綱領については、渡辺英一先生を始め、歴代の学長や多くの先輩方によつて、いろいろな角度から解釈され、私共日本女子大学の人口に膾炙した言葉なので、それ以外に特別云うべきことも残されていない。しかし先生の誕生日、第百回を一昨年に迎えたことではあるし、この頃は三つの大精神に面と向うことを故意にしない風潮もあるので、現代思想に照しつゝ、社会事業の哲学的基礎概念を考察し、本学の三大教育精神にも少し触れて行きたい。

ブラーグ教授に征えば、先ず社会事業にはその基礎となる哲学が必要である。宗教や文化的背景にもかゝらず、世界中の社

会事業家が共通に受け入れることの出来る、基本的な哲学原理は存在する筈である。

その第一として彼が挙げる命題は次の通りである。人間には道徳的識見がある。人間はその道徳的識見に従つて行動しようと努力する存在だ、というのである。これを換言すれば、人間は責任感を持つているので、彼のなかにある道徳的識見に応じて行動しようとし、どこまでも責任を遂行して行こうとする。このような先験的命題を予想せずには、人を助ける、社会事業は不可能になる。

その第二は、人間を社会的存在と見做して始めて、他人に対する援助活動は成立する。人間を社会的存在と見做さぬような哲学は結局、人間は助けられる存在だ、援助を受け得る存在だということを否定してしまふ。そのような哲学は人は影響され、感化されることも、他人との間に関係を樹立することも出来ない、ときめこんでしまつてゐるのである。

アリストテレスが「人間は社会的存在だ」と云つたことは周知の事実であるが、この言葉は少しく説明を要する。生物学者であつた彼が人間は社会的存在だと規定した時、人間には生物学的ニードがあつて、それが已むなく人間を社会的にするのだと考へたのであろう。人間をこのように考えるだけでは十分でない。社会事業は更に進んで、人生に於いて人間が人間と共にある状態、私共のあるがまゝの状態は人間にとつて本来的で、必要な状態であると考へている。これは他人なくしては、人間は人間らしくなることが出来ないし、人間らしさを継続することも出来ないわけである。

社会事業の基礎となるべき哲学的原理の第三は、人間はそれぞれ個性を持つており、それぞれ異つた存在であることを予想し、又これを承認しておくことである。これが事実でなければ、私共のあるがまゝの状態は多様性なき単調さで色どられ、社会事業は人生に於て、何の役割も持つことは出来なくなるであらう。これに反して人間はそれぞれ異つており、人間が人間と共にある状態は人間にとつて本質的だと考へるならば、それだけで人を助ける働きは可能になるのである。社会事業家達は一樣に人間の尊厳を重んじるが、又人間は異つた個性を持つて差支えないし、自己決定の権利を持つべきだと考へている。

以上に挙げた三つの原理の上に、社会事業の哲学は基礎づけられている。道徳性、社会性、個性の三つの面は一人の人格が形

成され、成長・円熟してゆくのに欠くことの出来ぬ条件であると同時に、又社会事業が努力して築き上げようとする、理想的共同社会の基盤でもあるのである。これら三つの社会事業の哲学的原理はその表現の仕方は異つてゐるとは云え、成瀬先生の三つの教え「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」として、丁度四十年前、死を眼前にひかえて私共後進者に遺された三大教育理念と全く、相呼応することは、当然とは云いながら、誠に不思議と云わざるを得ない。

先ず第一の原理は人間を道德的存在、自己決定の主体と見做しているわけで、人間の道德性と責任感を強調する意味で「信念徹底」に通ずる。成瀬先生も道德を以つて教育の基調とされたが、その内容は決して単なる因襲道德ではなくて、最も深い意味での道德、宗教的精神そのものであつた。渡辺先生の言葉で言えば先生は「教育に於て道德を重んじた」のであるが、その道德は内容的に緊縮しては、婦人としての教育の精神的基軸を成すものであり、外延的に拡大しては、人間としての教育を包括するところの、全人格向上の努力である。而して斯の如き努力が集中され、継続されて、不断の緊張と活気とを示すためには、その源泉となり、帰趨となり、根幹となり、憑拠となるところの、至上至善の力の本体が、絶えざる活動として、各自の精神に充実し、遍満し、生得的に常在しなくてはならぬ。宇宙に顯現して森羅万象となり、森羅万象に包まれて宇宙に遍満するところの、微妙不可思議な至高至大の活力、神聖な靈的生命という外に名づけようのない、實在の分化的発現たる人々の精神には、この靈的大元生命の流れが、脈々として絶えず波打つてゐる。この流れが即ち吾人の人格を創成し来る原力である。」（成瀬先生伝二二六頁）このように向上しよう、進歩しよう、絶えず願つてゐる人間の精神には、宇宙の靈的大生命が脈々と流れてゐるとの確信から、宗教的人格的生活原理を、信念徹底という標語にまとめ、教育の根本原理にされたのである。この意味で、人間の尊嚴、人格の価値は至上のもので、何ものにもかえ難い。カントの所謂「人格を手段とせず目的として扱え」もこの境界を力強く述べたに外ならぬ。

これと関連して、先生の所謂三つの教育方針「人として、婦人として、国民として」を挙げれば、その第一が既に述べた原理に通ずるのは云うまでもない。人間は彼が存在するというその事実によつて、価値を有する。三つのうちで最も根本的なこの原

理は、社会事業成立の根本条件として、その中に深く滲透しているわけである。

この人間本来の価値と尊厳に対する信仰は、又いくつもの重要な人権の中心点でもある。凡ての人間がその生命、自由、安全に對し、基本的人権を持つことはフランス革命以来の人間に對する考え方で、米國憲法にも、近くは我が日本國憲法にも、國運憲章、人間に關する世界宣言にも、明らかにうたわれている。民主的政治に欠くことの出来ぬ選挙に關する市民権、思想と良心と宗教の自由或いは信仰、言論、集會の自由に關する知的權利、人格の尊嚴とその自由な成長發展には欠くことの出来ぬ社会的安寧と文化や教育上の機會均等、健康と幸福、教育と文化生活をするに必要な程度の生活を営むための、働く權利を含めて、社会的權利が社会事業の第一の原理に深く横たわつていたのである。従つて現代の社会事業は國運憲章や國運の第三回總會で、一九四八年、十二月十日に採用された人權宣言、それから引き出された諸々の憲章や法律とも、明りと一致し、これに向つて努力し続けてゐることを記憶して置きたいものである。

尚、これに續いて、近來、問題になつてゐる新しい道德教育の根幹となつてゐるところを考究するのも興味がある。道德教育は本来、学校・家庭・社会の三者を通じて十分に行われ、それらの間に一貫性が保たれることによつて、始めてその徹底を期することが出来るが、わが國の社会事情はこの点で、必ずしも望ましい状態にあるとは云い難い。しかし、欧米諸國では道德教育は、家庭と社会の責任で行うことが常識とされている。道德教育は宗教教育を通じて、又キリスト教的世界觀を支柱として行われている。更にソ連や中共のような共產黨の國々では、マルクス・レーニン主義を根幹とした教育が徹底的に行われ、これが道德教育を強く支配してゐる。

ところが、現在のわが國の事情は、國民共通の道德教育の支柱を、欧米に見られるような宗教に求めることが出来ないし、共產黨諸國に見られるような特定のイデオロギーに求めることも出来ない。

そこで、学校・家庭・社会を結ぶ新しい道德教育の振興をはかる上からも、先ず学校に於ける道德教育を充実する必要が痛感されて、道德教育の目標と内容が明らかにされたのである。

しかもその目標としているところが、特に私共の興味と関心をひくわけである。即ち道徳教育の目標は、既にふれた人権に関する世界宣言や日本国憲法に述べてあり、基本的人権の尊重と通ずるものであり、教育基本法に述べてある人格の完成ということと、根本に於て相呼応する。これは要するに、人間尊重の精神を道徳教育の究極のねらいとしたことに外ならない。新しい道徳教育の構想をもつた道徳教育指導書には「人間尊重の精神を一貫して失わず、この精神を、家庭と学校、その他各自がその一員であるそれぞれの社会の具体的な生活の中に生かし、個性豊かな文化の創造と民主的な国家及び社会の発展に努め、進んで平和的な国際社会に貢献出来る日本人を育成することを目標とする」と明示しているのである。

以上に見て来たように、人間の価値と尊敬を確信し、民主的社会的制限内で自己決定の権利を認め、受け入れるのが社会事業の第一の哲学的原理であり、信念徹底の現代版だと云うことが許されよう。

社会事業の第二の哲学的原理、人間の社会性の強調は、云うまでもなく我が教育綱領の「共同奉仕」と通じ、既に述べた教育方針中の「国民として」に通ずる。これを現代の哲学思想に照して、少し敷衍して行こう。現代実存主義者中のパウエル・サルトルやアルベルト・カミュの如き文学者は、人間の連帯性を徹底的に否定してしまうので、(サルトルの「出口がない」という劇の終りには「他人は地獄だ」という言葉が見られる。)社会事業という人を助ける職業は成立し難いことになつてしまふ。しかし同じく実存主義者でも哲学者カール・ヤスベルスは人間と共にある状態、相互に對し同情と愛の心を以つてこの世に共に存在する姿は、人格の成長と人間独自の価値の発展にとつて、根本的条件だと考へている。彼は「私の哲学について」と題する論文の中で「私の哲学することの課題はこれである、人間は彼独りでは人間となることは出来ない。自己の存在はもう一人の自己存在と交わつて、始めて真の存在となり得る。独りでは私は憂鬱な孤独に沈淪するだけである。他人と交わることによつてのみ、私自身は相互発見の行為の中で、明らかになり得るのである。私の自由も、他人が自由である場合にのみ存在し得るのである。孤立した存在は単なる可能性であるか、無に消失してしまうかである」(W・カウフマン編、実存主義一四七頁)とも云つてゐる。

しかしながらヤスベルスは人間が人間と共にある状態、そのような交わりと真の意味の伝達―コミュニケーション―は如何にして成り立つかを考究して、若かりし日のことを回顧している。彼が哲学をし始めた頃には、知識に対する本来的な渴望と他人と通じ合いたいとの強烈な衝動とのうち、何れがより一層強かつたかを、明らかに云うことは出来ない。兎に角、知識というものは、人々を結びつぎなを通じて、始めて十分な意味を持つことが出来る。しかも他人との一致と合意を勝ち得んとの願いをみたすことは、実に困難である。既成の概念や事柄が明瞭にされないまま、安易な妥協がなされ、そのため人間は云わば麻痺状態に陥っている。人々の間には真の意味の理解はなく、全くあきれ果てる始末であつた。彼は更に続けて云っている。「私の若い頃もその後も経験することだが、人々は頑固で交わり難く、道理に耳を傾けようとしない。事実を無視し、話し合いを許さぬ無関心、他人を近づけさせぬ防禦的態度は度々、私を悩ましたものである。そのような態度は、重大且つ決定的な隘間に、他人がその人間に近づく可能性を全く失つてしまふのである。」(W・カウフマン編実存主義、一四五頁)更に彼の「哲学的叢知への道」の中の一章「哲学的生活態度」の中には、人と人との交わりにつき、次のような意味の傾聴すべき言葉が見られる。人が内省によつて自分独りだけで得たものは、若しそれが凡てであれば、何も得なかつたと同じことになる。伝達されぬもの、即ち人との交わりに於て実現されないものは、まだ存在しないものであり、伝達に基礎を持たぬものは適當な根拠を持たぬことである。「真理は、二人から始まる。」(ヤスベルス著「哲学的叢知への道」一二四頁)「若しあなたがたのうちふたりが、どんな願い事についても地上で心を合せるなら、天にいますわたくしの父はそれをかなえて下さるであらう。ふたりまたは三人が、わたくしの名によつて集つてゐる所には、わたくしもその中にあるのである」とマタイ伝十八章十九、二〇節が教えている通りである。従つてヤスベルスの云う哲学的生活は絶えず他人との交わりを求めること、逡巡することなく思想伝達を敢行すること、常に異つた装いをこらして、自分を押しつけようとする強情な私の自己主張を放棄することを必要とする。このように自己を放棄していると、ある予想し難い仕方、私は本来の私に帰つて行く。「私は自分にとつても恰も贈りものであるかの如く、自分をとりもどすようになる。」(同上二四頁)このようなことを絶えず待ち望んで生活して行くことを、哲学は要求するのである。

更にこのように限りなく伝達・感応の生活に自己を開放するならば、こんな結果が現れて来る。無理強いしても決して現れて来ない事柄、即ち私の愛は明瞭になり、秘かではあるが神の命令と存在の啓示が、それと共に人生の絶えざる動乱の中で心の平安が、最も恐しい破局に際しても失われない事物の根柢に対する信頼が、激情が動いても迷うことのない決断が、此の世の刹那的な誘惑にも負けない忠実さが、現れて来るのである。

以上に見て来たように、実存主義者の問題は決して個人主義的ではない。それは孤独の中でなくして、交わりの中で現われる。その問題と云うのは、他の自我と関係せずには自我を持つことの出来ぬ、社会的人間が有する実存的問題である。既に述べた交りと伝達も、私と汝、一人の我と他の我との間のみ起り得るのであつて、これは自我と事物の間には決して起らない。このように人と人とが直接に出遭うことなしには、真理は私にとつて、十分に証拠たてられたものではない。仲間や共作者、教師更には確証してくれる証人がなくては、私は私の想像のままに流されてしまふだけである。このことは最も些細な知識についても云えることである。友達や先生がなければ、犬猫の名前やその主な特徴をさえ知ることには出来ないであらう。尤も犬や猫に實際、出くわさなければ、知ることが出来ないわけではあるが。私共の知識が大切に、意義深いものであればある程、直接、知識の対象と出くわすことと同様、仲間との交わりが重要になつて来る。良心の声は社会の声ではないが、その声を聞いた他人が介在し、連絡し、助けてくれなければ、その知識は理解出来るようにならないのである。他人の義務は何であらうと、これが私の義務だと、他人が何をなさうと、これが私のなさねばならぬことだと云いきることの出来るところまで行きついて、私共が一つの決断を下し得るのは、ひとり淋しく心中で熟考する時と云うよりも、自分と他人とが出遭い、活潑に話し合うところではなされるのである。これは元エール大学教授、現在はハーバード大学教授リッツチャード・ニーバーが「社会的実存主義」と呼ぶところである。実存主義の考え方に照して、社会事業の第二の哲学的原理を考察して来たが、この原理が社会事業にとつて、如何に重大な意義を持つかは云うまでもない。私が他人と共に在ること、他人の愛と理解と同情が、私の人格の成長発展に如何に大きな刺激となり、奨励となるかは自明の真理である。

しかしこれと同時に人間はそれぞれ相異つた存在だ、個性的な存在だと仮定し、その事実を受け入れている。これが社会事業の第三の哲学的原理であり、我が教育綱領では自発創生がこれに相当する。三つの教育方針の中では、「婦人として」がこの原理の内容を持つていると考えられる。麻生正蔵先生が校長であつた頃、この教育方針に「個人として」を加えられた。勿論、そうすれば一層、明らかになるが、他方、三つの原理に従つて考えることが出来なくなる。兎もあれ、人間が個性的存在であることを認めない限り、人間が人間と共にある状態は多様な統一ということになり、社会事業はその役割と機能を失つてしまうことになる。人間が人間と共にある状態こそが、重要で、本質的だと信ずると同時に、人間にはそれぞれ個性があると考へて始めて、他人援助の処置も可能になるのである。社会事業家達は一致して各個人の尊厳を重要視し、各人が相與する権利を受け入れることが、社会事業家にとつて最も大切だと考へている。人が円熟したと云えるのは、他人は皆、異つていてという事実を受け入れることが出来るようになった場合である。このことは宗教信条や文化的背景の相異にもかかわらず、社会事業家が一樣に認めるところである。しかしこゝにひそむ困難な問題は、個性の相異が人格の成長にとつて、どの程度本質的であり、それがどの程度社会によつて受け入れられるかという点にある。又社会事業家にとつての重大問題は、凡ての要因と他から受ける影響にもかゝわらず、如何にしてその対象者が自分自身の決断を下せるようになるか、又出来る限り自己決定をするよう如何にしてその対象者を援けられるか、という点にあると云われる。

何れにしる人間の個性的原理、我が三大教育綱領中の自発創生の教へは、三つのうちでもその実行、実現は最も困難である。何時ぞや学生新聞に依頼されて「自発創生」について小文を書いたことがある。その内容を思い出して、私は私なりに個性の原理を考へて見よう。先生の教育精神の根幹であつた自学自習、独立自営、経済自給、天職使命等の言葉にもられた一連の思想と精神は、又自発創生にも通ずるものである。こゝには、先生が婦人に対して特に要望された研究的態度と経済自立の必要を、力強く感得することが出来る。信念徹底が根本原理であり、共同奉仕が社会原理であるとすれば、自発創生は個性原理だと云われるように、自発創生には個人の特質を見出し、個性を育て、そこに各人の天職使命を自覚し、完うして行く自己創造の過程が手



ぎわよく示されている。

このように先生の三つの教えは一応、人生の三方面についての指導原理と解されるが、考えようではその一つ一つが人生全体、人間の全存在についての教えだとも思われて来る。

このような立場からすると、創造的活動は常に一種の成長であり、何かが増加することであり、かつてこの世に存在しなかった新しいものがつくられることである。突込んで考えると、完全に新たなものが果して可能であるだろうか、と疑わしくなつて来る。しかし創造的活動はその本来の意味からすれば、無から有を生み出すことである。無が有となるのである、無存在が存在となるのである。プラトンのエロスの如く、創造活動は貧困と富裕の子供、力の欠如と力の潤沢の産物だと云われる。創造は罪と結びついているが、同時に献身的である。真の創造は常に精神を身体の低い要素から解放し、浄化すること、精神が勝利を得ることを意味する。創造の働きは原則的に物事が発生するとか、流出するとかとは違つてゐる。流出の場合は物質の構成分子が中心から放射、分離するわけである。又創造は進化が意味するように、力が再分配されることでもない。創造は進化と同じことを意味するどころか、進化の逆でさえある。特に生物学的進化について云えば、何も新しいものがつくられないで、古いものが再分配されるに過ぎない。進化が必然的だと考えれば、創造は自由から来ると云わねばならぬ。創造は生命の最大の神秘であり、かつて存在しなかつた新しいもの、何もものからもひき出されたり、何もものによつても産み出されたりしないものが出現する。それが創造の神秘である。それ故、創造の神秘は自由の神秘だと云われるわけである。創造は測り知れぬ自由の深淵から湧いて来る。そのような自由のみが新しいもの、かつて存在しなかつたものの根源となることが出来るのである。既に存在するものから、完全に新しいものを創造することは不可能である。そこには既に述べた流出と発生と再分配があるのみである。それに反して創造活動は無から、自由から、真存在の世界に貫通し、突入して行くことを意味する。

このような創造の神秘は創世紀の神話にくみとることが出来る。神は無から、即ち自由そのものから、自由にこの世界をつくつたのである。この世界は神からの単なる流出でもなければ、神から進展したのでもない。神が創造したのである。従つてこの

世界は絶対に新しく、以前には存在しなかつたものである。創造活動はこの世界が創造されるが故に、創造者が存在する故に、実は可能なのである。又聖書には種子がよき土地にまかれれば、必ず何十倍もの收穫があり、(マルコ伝四の八)人間に与えられた才能は相当の効果をおさめてかえされねばならぬと説いてある。この譬話には人間の創造的行動、人間の天職使命が暗示されている。人間の才能を土中に埋めてしまい、創造活動をしないのは神がとがめるところである。又天賦の才能は神より与えられたもので、人間は創造的生活をするよう、意図されているわけである。才能にはいろいろの種類や程度があろうが、人は彼に与えられた特殊の才能に従つて、創造的奉仕をするよう、呼びかけられている。しかし要は神が人間に求め、期待するものは何であるかを読みわけることが出来ねばならぬ、自覚することが出来ねばならぬ。人間は神によつて創造されたが故に、彼も亦一種の創造者となり、創造的活動をするよう、要望される。事実、人間は彼自身が一種の創造者となるように創造されたのである。先生の示された自発創生の教えをこのように解することによつて、私共の人格は幾分でも熟成に近づいて行くことが出来るのである。

以上、甚だ粗雑ながら、社会事業哲学の三つの原理と成瀬先生の三つの教えを關係づけて見た。大方の読者の叱正と批評を、心から御願ひする次第である。